

## 大学院進学に必要な 2 つのこと

第 19 期大学院生 森 直也  
(第 17 期 OB)

院生さんと呼ばれるようになってから、早くも 2 年が過ぎようとしている。私は今年、慶應義塾大学大学院商学研究科修士課程を修了する。4 月からはコンサルティングファームで働くため、一旦は学問の道の後になることになる。そんな私だが、後輩たちからは嬉しいことに、どうしてそんなに頭が良いのかとか、どうしてそんなに綺麗な文章が書けるのかと言ってもらえることが多かった。もちろんそれらは身に余る過大評価に他ならないのだが、私には、常々感じていたことがあった。それは、学部生にとって大学院生が特別視され過ぎていないか、言い換えれば、大学院進学が敬遠されているのではないか、という疑念だ。私は、学部生時代に何か優れた能力を持っていたから大学院に進学したわけではない。能力だけで言えば、これまで第 18 期生から第 20 期生にかけて面倒を見てきた後輩たちと何も変わりはないであろう。修了を控えた今、能力よりもっと大事なことが私の目には映っている。そこで私は、大学院を去る身であるものの、学問の道を歩む同志が増えることを願い、現 3 年生の第 20 期生の後輩たちや、本稿に辿り着いた未来の後輩たちに向けて、大学院進学への想いを綴ろうと筆を取った次第である。

早速ではあるが、大学院進学に必要なと思うことは 2 つある。ただし、この 2 つは、研究に係る能力のことではない。なぜなら、その能力は、小野ゼミの活動に真剣に取り組みさえすれば、十分に身に付けることができるからである。これから示す 2 つは、小野ゼミ生であることを踏まえた上での 2 つだ。

まず 1 つ目は、数年間に渡って愛し続けることのできる研究分野との出会いである。大学院生とは、学生ではなく、研究者だ。対外的な挨拶の場では、必ずと言っていいほど研究分野が尋ねられる。自分の名前は、研究分野と併せて認知されるのである。修士論文は、そんな自分がどんな研究者であることを証明する文書だ。その長さは膨大であり、私の拙稿でさえ 100 ページを優に超えている。そこまで熱を注ぎ込める研究分野には、一朝一夕で出会えるものではない。三田祭論文や卒業論文でテーマ探しに苦労した経験がある人には、想像に難くないであろう。かく言う私は、幸運にも三田祭論文を執筆した際に、現在の研究分野—セールス・プロモーションに出会うことができた。自分の好きな分野で、まだ世界中の誰も思いついていない論理を構築していると想像すると、楽しくて仕方がなかった。論文発表の質疑応答の際、自分の論理を守り、聴衆を納得させることができたときには誇らしい気持ちでいっぱいになった。そうして私は、三田祭論文から、卒業論文、レビュー論文、そして修士論文に至るまで、約 4 年間に渡って同じ分野で研究を続けた。その原動力となったのは、まさしく研究分野に対する愛であったに違いない。後輩たちのみんなには、この学術的な出会いを大切にしてほしい。既存研究の論理を拡張しやすいからといった短絡的な理由でテーマ探しを終えてしまってもったいない。その先には、素晴らしい出会いが待っていて、

みんなを学問の道へと導いてくれるかもしれないのだから。

大学院進学に必要なと思うことの2つ目は、自分と同じ熱量で研究分野について議論できる仲間との出会いである。大学院生は孤独だ。これは、小野先生に次ぐ、第2の恩師とも言うべき高橋郁夫先生から、大学院生になって初めての授業でいただいた言葉である。当時の私は、その言葉の意味があまり分からなかったのだが、2年間の大学院生活を終えた今なら分かる。修士論文は、三田祭論文とは違って共同研究ではないため、全てを1人で進めなければならないのはもちろんなのだが、1人で研究を行うにしても、卒業論文とは比べ物にならないほどの既存文献をレビューした上で仮説を構築し、より重層的な実証分析を実施しなければならない。2年間の大学院生活を全て使って研究成果をまとめるまでの道のりは、想像以上に果てしなかった。そうした状況の中で、自分と同じ熱量で研究分野について議論できる仲間の存在は、大きな支えになってくれる。これは進捗を上げやすいからという単純な理由からではない。より重要なのは、毎日1人きりで悩み苦しんでいたことに関心を示し、研究をより良くするために真剣に意見してくれる人が1人でもいてくれているという事実である。それによって、自分の研究は、決して自己満足の産物ではなく、議論を展開するだけの価値があるものだということに気付くことができる。たとえ最初は議論の輪が小さくとも、その輪が大学院授業や学会を通して徐々に大きくなっていく可能性を感じながら研究に没頭できることは、研究者にとっての幸せの1つだと僕は思う。私にとって、同じ熱量で研究分野について議論できる存在は、まず、小野先生であった。小野先生には、三田祭論文からずっと同じ分野で研究を続ける、研究者としての私を暖かく見守っていただき、学部生時代から変わらない熱量で、最後まで手厚いご指導をいただいた。そして、私の大学院生活には、なくてはならない人がもう1人いた。それは、第17期生の同期、舞香ちゃんである。彼女は、三田祭論文の共同研究者であり、それゆえ、私と同じ関心と知見を持ち合わせていた。それに加えて私たちは、卒業論文においても、お互いにセールス・プロモーションの分野で研究を続けた同志でもあった。彼女は、社会人になった後も、私が持ちかけたどんな議論にも付き合い、いつも真剣に意見してくれた。修士論文の提出前には、膨大な長さであったにもかかわらず、細部に渡るまで目を通してくれた。そして、最後まで妥協することなく私と共に研究に向き合ってくれた。彼女のように、本気で議論できる相手が身近にいたからこそ、私は、路頭に迷うことなく研究に邁進することができたのだと思う。

以上の2つが大学院進学に必要なと思うことである。私は、何か優れた能力を持っていたからではなく、研究分野との出会い、そして、その研究分野に真剣に向き合ってくれる仲間との出会いがあったからこそ、大学院に進学した。それが、森 直也という1人の大学院生の真実である。私は、本当に光栄なことに、今日までご指導いただいた先生方から、研究者としての素質を評価した言葉をいただいていた。これまでの私なら謙遜するところではあるが、私は今、その言葉を馬鹿正直に信じたいと思う。私はこの先、コンサルタントにでも、研究者にでも、何にだってなれる可能性を秘めている。もちろん私だけではない。本稿を読んでくれた誰もが可能性に満ち溢れている。だから、後輩たちのみんなもどうか自分の力を過小評価しないでほしい。私たちの可能性は無限大だ。